

小学校英語活動の目標 ーコミュニケーション能力の「素地」と「基礎」ー

板垣信哉・鈴木渉

1. 小学校学習指導要領

平成20年度に告示された新小学校学習指導要領によれば、「外国語活動」としての小学校英語活動の目標は以下のように定められている。

外国語を通じて、言語と文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。(p. 107)

しかしながら、個々の内容についての解釈が異なることが指摘されている。本稿では、上記の目標に関して以下の6つの点を論じることを目的とする。① 言語と文化について体験的な理解、② コミュニケーション活動の積極的な態度、③ 外国語(英語)の音声を中心に、④ 外国語(英語)の基本的表現を中心に、⑤ 外国語(英語)に慣れ親しむ、⑥ コミュニケーション能力の「素地」

2. 外国語(英語)活動の論点

① **言語と文化について体験的な理解** 小学校5年生の認知発達上、形式的・論理的思考は可能であると一般に言われているが、初めての外国語活動をはじめめることを考慮すれば、具体的状況・話題との連合を重視することが必要である。その意味で、英語ノートおよび小学校英語活動全体のシラバスが生活場面・話題中心になることが妥当といえる。以下の例は、クラス担当者(HRT)とALT(Assistant Language Teacher)の定型会話の導入で、HRTの工夫がみられる活動である(仙台市立向山小学校公開研修会 2009年11月27日)。

HRT: What do you want for Christmas / your birthday?

ALT: I want a camera / the guitar for Christmas / my birthday.

(英語ノート 1 Lesson 6 「外来語を知ろう」)

英語ノートでは、外来語発音と英語発音の「違い」を意識させることと目標表現の“I want ...”と“What do you want?”の指導を目指しているが、授業者の工夫として、“... for Christmas, for your/my birthday”を追加した表現として導入されていることが重要である。つまり、「クリスマスと誕生日での贈り物」の背景知識との関連づけによって、児童に目標語彙・表現の「体験的理解」を促すことになる。「言語を体験的に理解する」ことの観点からすると、目標表現とその使用場面との直感的に理解できる連合として、児童に呈示することが大切である。

② コミュニケーション活動の積極的な態度 コミュニケーション活動の積極的な態度は近年の第二言語・外国語習得理論において「必要十分条件」と考えられている。さらに、積極的なコミュニケーション活動において「正確さより流暢さの重視」と「形より意味の重視」の2つが理論的前提である。小学校英語活動においては、「流暢さ」と「意味」を重視することが一般的であり、「正確さ」と「形」の指導は中学・高校での英語教育の課題といえる。以下の2つの例は、児童の文法的誤りにこだわらず、コミュニケーション活動の目的である「意志伝達」の「達成感」を児童に感じさせるためのHRT/ALTのフィードバックといえる。

児童：*I like apple. HRT/ALT：I see. You like apples / an apple.

児童：*Yesterday, I play baseball. HRT/ALT：I see. Yesterday, you played baseball.

上記の例のように、HRT/ALTが「なにげなく言い直し(recast)をする」ことで、児童が「知らず知らずのうちに正確な表現を身につける」ことを期待し、児童・生徒がコミュニケーション活動に対する意欲・関心を維持できる工夫を心がけることが大切である。その意味で、小学校英語活動は、基本的には「暗示的指導」に徹することが必要である。

③ 外国語(英語)の音声を中心に 言語学および言語教育における「音声第1主義(speech primacy)」の観点によれば、「話しことばの習得」から「書きことばの習得」が自然な道筋といえる。特に、小学校から英語に触れることになれば、「音声中心」が自然であり、このことは指導上の当然の前提といえる。その意味で、音声中心の「歌」、「チャンツ」、「ストーリーテリング」などを取り入れることで、英語の音声・リズムに「慣れ親しみ」、結果として「音声中心の暗示的知識」を「潜在記憶」の一部として蓄積することが重要である。以下はチャンツの一例である(英語ノート 1 Lesson 6 「外来語を知ろう」)。

“What do you want?” (3回の繰り返し)

“Tomato, tomato, red tomato please”

“Banana, banana, yellow banana please”

このチャンツに慣れ親しむことで、音声・リズム面の言語知識に加え、WH疑問文(“What do you want?”)の文構造および語順の「形容詞+名詞(“red tomato, yellow banana”)」を暗示的に身につけることになると考えられる。

④ 外国語(英語)の基本的表現を中心に 小学校英語活動の基本シラバスは状況・場面・トピックを中心としたもので、英語ノートにおける語彙・目標表現が小学校5年生・6年生の生活、話題、言語行動の基本場面に関連している。以下に例を示す(学習指導要領解説 外国語活動編 pp. 21-22)

・挨拶：“Hello. How are you?” “I’m fine, thank you.”

・自己紹介：“Hi, my name is Taro. I like English. I don’t like tennis.”

・道案内：“Where is the post office?” “Go straight. Turn left / right.”

これらの基本表現は、現在、中学1年の指導内容であるが、新学習指導要領では、小学5年・6年での目標表現として定められている。したがって、小学校英語活動では、これらの基本表現を文法的に分析することなく、意味と対応する英語表現の「まとまり・チャンク」として「音

声的（+視覚的）に丸覚え（暗示的・潜在的記憶）」することを指導目標と捉えることができる。

⑤ 外国語（英語）に慣れ親しむ（教授・学習ではなく） 小学校英語活動と中学・高校での英語教育の根本的な相違点は、後者の場合、英語の教授・学習であるのに対して、前者では、体験・経験として「慣れ親しむ」ことであると考えられる。したがって、英語活動の指導に際し、児童が英語活動に取り組む際の情意的要因を考慮することで、児童が「緊張したり」、「成績・評価を気にしたり」、「必要以上に身構えたりする」ことを避けることが最優先課題である。つまり、英語活動に際し、教室の「和らいだ雰囲気」が必要不可欠といえる。以下の例は、この点に関する HRT の工夫を示している（川崎第二小学校外国語活動研修会 2009 年 8 月 28 日）。

例 1

HRT：“How are you?”

児童：“I'm hungry.”

HRT：「さっき、お昼食べたじゃ・・・」

例 2

児童：“How are you?・・・先生”

HRT：「昨日、楽天が勝ったから」“I'm happy.”

注目すべき点は、クラス担当者が児童との挨拶の定型会話を機会的に紹介することなく、「さっき、お昼食べたじゃ・・・」、「昨日、楽天が勝ったから」と定型会話の文脈を十分に取り入れていること、そして教室全体の「和らいだ雰囲気作り」に工夫していることである。つまり、小学校英語活動においては、「学級経営」、「和らいだ学習環境」、「英語活動の効果」の三位一体の重要性をあらためて認識する必要がある。小学校英語活動が「児童が英語に慣れ親しみ、英語嫌いにならない」ことを目標とする限り、このことは最も重要なことかもしれない。

⑥ コミュニケーション能力の「素地」 小学校英語活動の最終目標であるコミュニケーション能力の「素地」に関して、多様な解釈が提唱されている。本稿では、上述の①から⑤までの議論を踏まえ、「中学で『聞く』、『話す』、『読む』、『書く』の言語スキルの『基礎』を養うための前提としての直感的な音声中心の暗示的知識（潜在記憶の一部として）の蓄積」と捉える。たとえば、中学校の英語科授業で、生徒が英文をインプット処理する際、「この英文・フレーズは、・・・どこかで聞いたこと/見たことがある・・・」、「この単語・綴り・・・なんか、いつか、どこかで見たことがあるな・・・」などの「内言・独り言」が起ることが重要である。つまり、小学校英語活動の指導目標であるコミュニケーション能力の「素地」である「暗示的知識・潜在的記憶」の蓄積によって、この種の内言が可能といえる。そして、中学において、生徒が文法の意識的な教授・学習成果として、英語の「明示的知識（文法構造の意識的知識）」を身につけることになる。これらの明示的知識によって、文法依存型の創造的言語活動が可能となる。つまり、中学校英語教育の目標であるコミュニケーション能力の「基礎」を英文法に

関する意識的な明示的知識・顕在的記憶として捉えることができる。それと同時に、中学・高校では、これらの明示的知識の自動化・手続き化のための運用練習が行われ、その結果として、徐々に自動化された/手続き化された暗示的知識が構築されると仮定される。

3. 結語

外国語教育の新学習指導要領において、コミュニケーション能力の「素地」と「基礎」に関する明確な解説・説明が呈示されていないことで、教育現場の混乱を招いているといえる。さらに、このことで、小学校英語活動と中学校英語教育の「接続」の議論がさらに混迷を深めていることも事実である。本稿では、コミュニケーション能力の「素地」と「基礎」のそれぞれを文法構造において非分析的な「暗示的知識・潜在的記憶」と文法構造において分析的な「明示的知識・顕在的記憶」として捉えることが妥当であると考え（Bialystok, 2001）。これらの理論的枠組みを踏まえ、小学校英語活動と中学・高校英語教育のそれぞれの指導目標と接続を議論する必要がある。

注

本稿は、平成 21 年度仙台市教育委員会小学校英語活動実践研究校連絡協議会の報告書の一部に基づいたものである。

参考文献

- Bialystok, E. (2001). *Bilingualism in development: Language, literacy, and cognition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ellis, R. (2008). *The study of second language acquisition* (2nd ed.). Oxford: Oxford University Press.
- Ellis, R., Loewen, S., Elder, C., Erlam, R., & Philip, J. (2009). *Implicit and explicit knowledge in second language learning, testing and teaching*. Bristol, UK: Multilingual Matters.
- Suzuki, W., Kubota, Y., Itagaki, N., & Takeuchi, M. (2006). Explicit and implicit second language knowledge on a grammaticality judgment task. *ARELE: Annual Review of English Language Education in Japan*, 17, 11-20.
- 板垣信哉 2003 明示的知識と暗示的知識の実証的研究—文法知識の理論化と文法指導の観点から— 宮城教育大学外国語研究論集, 3, 45-56.

— 宮城教育大学教育学部英語教育講座 教授 板垣信哉 —
— 宮城教育大学教育学部英語教育講座 講師 鈴木 涉 —